

けん玉

受け皿に玉を入れて遊ぶ木製玩具の日本版「けん玉」と広島地方の結びつきには長い歴史があります。けん玉の起源は、ビルボケという 16 世紀フランスの玩具にあるようです。ビルボケは受け皿で玉を受けて遊ぶ玩具で、江戸時代（1603～1867）にオランダ経由で日本に入ってきました。広島の際街廿日市は当時、木工細工や木工業で名高く、また宮島の厳島神社を訪れる人々にとっての玄関口でもありました。明治時代（1868～1912）には、廿日市の木工職人たちが、街を通る厳島神社の参拝者や旅人を買ってもらおうと、けん玉などの木製玩具の製造を始めました。このような初期のけん玉のほとんどは、ヨーロッパの同類の玩具同様、一つの受け皿と紐で玉を結びつけた持ち手から成るものでした。

1918 年に江草濱次氏という職人が、従来のけん玉を改良して受け皿 3 つ、持ち手、けん先を備えた玩具を考案し、これが今の日本のけん玉となりました。江草氏は、丸い玉が太陽、三日月型に湾曲した皿が月のようだとし、この玩具を「日月ボール（太陽と月のボール）」と名付けました。廿日市の木工職人は日本全国に良く知られていたため、江草氏は地元の工場に彼の考案した新しい玩具の生産を委託することにしました。こうして廿日市は、今日のけん玉の発祥の地となったのです。

けん玉人気のピーク期 1970 年代には、廿日市のけん玉生産量は年間 40 万個を数え、日本のけん玉生産量全体の 70%を占めていました。今ではけん玉人気は往時ほどではありませんが、廿日市市では今もけん玉生産が続けられ、市は市内の小学一年生全員にけん玉を配布しています。2014 年には廿日市市でけん玉ワールドカップが開催されました。